

## 五〇七号室の謎

——サリンジャーの「バナナフィッシュに最適の日」を読む——

野 間 正 二

そして少年たちがギリシア語で彼女に「シビユラよ、おまえはどうしたいのか？」と呼びかけると「私は死にたい」と彼女もギリシア語で答えるのがつねでした。<sup>(1)</sup>

——『サテュリコン』(岩崎良三訳)——

「バナナフィッシュに最適の日」は謎に満ちた作品だ。とりわけ最大の謎は、主人公シーモアの自殺にある。

シーモアは、保養休暇で来ていたフロリダのホテルの五〇七号室で短銃自殺する。この自殺は、シーモアの家族にさえ理解できず「許せない」<sup>(2)</sup>ものだった。もちろん読者は、シーモアのことを家族以上に知っているわけではない。だからシーモアの自殺は、読者にも謎だ。五〇七号室の謎である。ところがその謎は、こ

の作品の大きな魅力でもある。シーモアの自殺は、ウエンキーも言うように、最大の謎であるばかりでなく、作品の中心に位置する問題なのだ。<sup>(3)</sup>

シーモアの死の謎について、この作品を読んだ読者は、自分なりの解釈をしたくなる。それは、作者の意図したところであったはずである。その意味で、「バナナフィッシュに最適の日」は、作家の意図が成功裏に達成された作品だ。結果として、田中啓史氏の言うように「いずれにしても、シーモアの登場と自殺は謎に満ちており、(「バナナフィッシュに最適の日」は)サリンジャーの短編のなかではもっとも論ぜられることの多い作品のひとつ」<sup>(4)</sup>になった。

### これまでの解釈

そこでシーモアの自殺の原因の解釈のなかで、一般的に考えられるものを挙げてみよう。

まず、戦争で心に深い傷を負ったシーモアが、「狂気」の果てに自殺したという解釈がありえる。妻のミュリエルや義母や義父は、おそらくこの解釈を信じるだろう。研究者のなかにも、この素朴な解釈を支持する人が一九九九年の段階でもいる。<sup>(5)</sup>

また、精神世界に大きな価値を見いだしていた繊細なシーモアが、虚飾に満ちた物質的な世界にしか関心を払わない自己中心的な妻のミュリエルに絶望して自殺したという解釈もありえる。なぜならミュリエルのそうした性格が、戯画的と言えるほど誇張されて描かれているからである。

さらにサリンジャーの他の短編「エズメのために」を読んだ読者なら、戦争で心を病んだアメリカ軍の軍人を救済するエズメと、ミユリエルとの性格のいちじるしい対照のために、先の二つの要素を混ぜ合わせた解釈に賛成するかもしれない。すなわち戦争で心に深い傷を負ったシーモアが、虚飾に満ちた物質世界にしか関心がない妻と暮らすことで、その傷と絶望をさらに深め、精神錯乱のうちにピストルの引き金を引いたという解釈である。<sup>(6)</sup>

以上のような解釈は、それを否定する証拠は作品中に見いだせないという意味から、妥当な解釈であると言える。また常識的な解釈でもある。ただし常識的だから、「バナナフィッシュに最適の日」という作品の魅力を、新しく指摘する解釈でないのも確かである。

そこでその解釈の是非は措いておくとして、もう少し特徴ある別の解釈を紹介しよう。

まず、この作品が宗教的アレゴリーであって、シーモアの死はこの世から飛び出して「サトリ」の境地に入りえたことを表しているとする解釈がある。<sup>(7)</sup> この作品が含まれている短編集『九つの物語』の扉に掲げられた禅の公案「両手の鳴る音は知る。片手の鳴る音はいかに？」という隻手の音声は、インパクトが強い。それゆえこの作品も禅となんらかの関係があるだろうと想像するのは自然だ。しかも禅というものは、西洋人にはエキゾチックで神秘的な異文化である。だから西洋人が生死を越えた境地である禅の「サトリ」を、死と直接に結びつけて考えるのも仕方がないのかもしれない。だが、もちろん自殺と「サトリ」とはいかなる意味でも結びつかない。

ただしシーモアの弟や妹たちが、長兄シーモアは「サトリ」の境地に、自分たちの中では一番近くまで達していたと信じ、自殺と「サトリ」を結びつけたいと望んでいたのも事実である。<sup>(8)</sup> しかし言うまでもないが、

その肉親の願望は願望であって、自殺は「サトリ」から生まれたとする解釈の妥当性を保証するものではない。

またシーモアは、自分の足の指が六本の奇形であることを、シビルに指摘され（あるいは、指摘されたと考え）、自分の異常さを意識したがゆえに、自殺を執行したという解釈がある。その根拠として、バナナフィッシュが六本のバナナをくわえているのを見たときシビルが言ったことを挙げている。浮袋に乗っていたシビルは、波をかぶって海中を一瞬見たとき、シーモアの足の六本の指を見て、「六本 (six)」と言ったと（シーモアは考えた）解釈するのだ。

もちろんこの解釈は、たんなる思いつきで軽い冗談と言えるものであるが、存外まじめに解される恐れもあるので、反論しておく。

実は、シビルはこの直前にも、「六 (six)」という数字を言っている。シーモアに、『ちび黒サンボ』の中のトラの数を聞かれて、シビルは「たった六匹 (only six)」と答えている。(蛇足ながら、六匹ではなく、四匹が正解だ。) このとき、シーモアとシビルは泳ぐために海に向かって砂浜を歩いていたら、裸足であったはずだ。シーモアの足の指はよく見えていたはずである。とすれば、もしシーモアが自分の足の指が六本だと考えているなら、この時の「六」にも、シーモアはもっと過剰な反応を示していたはずである。もともとシーモアは、自分の足の奇形を信じていたなら、おそらく靴を脱がねばならない海水浴などしなかったはずだ。貧弱な身体を隠そうとして、海岸でもバスローブを脱ごうとしないシーモアは、そういう性格の人間だ。

シーモアは自分の足の指が六本あると信じているほど狂っているわけではない。たしかにシーモアは足に

異常な関心を持っている。しかしそれは自分の足の指が六本あるという奇形のせいではない。あとで詳しく述べるつもりだが、それには別の理由がある。

また、そもそもゴーグルも着けずに裸眼で、一瞬に、海底にある足の指の数が数えられるだろうか。それは不可能だ。経験者なら誰でも理解できることだ。

だからバナナフィッシュのくわえているバナナの数を、シビルが「六本」と答えたのも、先の『ちび黒サンボ』のトラの数を四匹ではなく、「六匹」と答えたのと同じく、具体的な事実を言ったのではない。シビルは、シーモアの足の指を数えて「六本」と言ったのではない。シーモアも自分の足の指の数が六本あるとは思っていない。

「六匹」のトラと「六本」のバナナというシビルの返答は、別の解釈をも生んでいる。数字の「六」は、シーモアとミュリエルの六年間の結婚生活を表している。六匹のトラは、『ちび黒サンボ』では溶けてバターになるから、六年間の結婚生活が「不快なおいにする無 (rancid nothingness)」<sup>(16)</sup> になったことを表しているとする。結婚が失敗であったことを象徴しているわけだ。また六本のバナナも六年間の結婚生活を表している。そしてバナナそのものは「低俗で物質的で性的な存在 (the gross, material, sensual existence)」<sup>(17)</sup> を表していて、シーモアを苦しめた妻ミュリエルや俗世間を象徴しているとす。さらに「六 (six)」は、ラテン語では「セックス」を意味するから、シーモアにとってセックスは地獄であったと結論づける。なぜならミュリエルが「セックスは喜びだ、だが地獄か」という雑誌の記事を読んでいて、なおかつシーモアが山羊座生まれ (山羊は、ギリシア神話では、かつて牧神パンであったが、怪物テュフォンを恐れて、山羊に姿を変えた臆病な動物) であるからだ主張する。

この解釈も、たんなる思いつきを並べただけだ。数字の「六」に注目するのは、ごく自然だとは思うが、それをシーモアとミュリエルの六年間の結婚生活に結びつけるのは強引だ。まず、「六」を繰り返すのは、シーモアではなく、シーモアがわずか一日か二日前に出合ったばかりの子供シビルだからだ。シビルには、そんな意図はまったくくない。それは明白だ。また、無残な結婚（セックス）生活を少女シビルに暗示させるのは不自然だからだ。つぎに、二人が六年間の結婚生活を送っていたことが分かるのは、この作品が出版されてから七年も経た後の作品『大工よ、屋根の梁を高く上げよ』においてであることも指摘しておく。

また、トラがバターに溶けることから、結婚生活の失敗を読み取っているが、これも強引すぎる。『ちび黒サンボ』では、溶けたバターは「ああ、なんてすてきな溶けたバターなのか！（Oh! what lovely melted butter!）」と表現されていて、「不愉快なおいのする」ものとは書かれていない。むしろそのバターは美味しいホットケーキの材料になるのだから、トラのバターへの変化は、あえて言及するのであれば、二人が溶け（解け）合って実り豊かな結婚生活を送ったことの象徴だと解さざるをえない。

さらにバナナの象徴的意味については、性的な意味合いを除けば、「そんなバナナ」とも思うが、一九四八年頃の米国では、そうだったのかもしれないと思われないでもない。たしかに日本では、バナナのイメージは、時代の変化とともにずいぶん変化したのだけれども……。

「六 (six)」と「セックス (sex)」の関係は、術学趣味のラテン語を持ち出すまでもなく、ごく陳腐な語呂合わせである。その指摘から、バターになる「六匹のトラ」と「セックスは喜びだ、だが地獄か」という記事とを関連させ、シーモアにとってセックスは地獄であったと結論づけられている。その証明としてデュフォンを恐れて変身した山羊（カプリコーン）の神話を示されても、私にはとても理解できない。ほとんど

論理的な展開や説明がなくて、直観的な指摘の断片のみからなっている。論文はゼン (Zen) の公案ではないのだから、少なくとも、ミュリエルの読んでいた雑誌の記事が、二人の結婚生活とどのように関連しているのかを説明しない限りは、文学作品研究のエッセイとしては不十分である。

この他にも、シビルがバナナフィッシュを「一匹見た」と言ったことが、シーモアの自殺の引き金になった、という解釈がある。その一匹のバナナフィッシュはシーモア自身を指していると、シーモアは(誤)解した。自分の正体がバナナフィッシュ(=俗世間の中で墮落してしまった人間の象徴)であることを、無垢なシビルに見抜かれたと、シーモアは考えて絶望した。その絶望が自殺を導いた、というわけだ。というのも、シーモアは「サトリ」の境地に憧れ、その境地をめざしていた求道者であった。それゆえ以前から、自分の「強い性欲」と「ミュリエルの女色」を、精神を向上させ清浄な生活をするためには邪魔になると考えていた。ところが、ミュリエルとの結婚生活を不十分ながらも続けてきた。しかしそういう自分をバナナフィッシュだと、シーモアは見なし嫌悪してきた。そんなときに、シビルにバナナフィッシュだと指摘されて、そういう生活からの脱出の意味を込めて、自殺の意志が固まったという解釈だ。<sup>(13)</sup>

この解釈は、別の短編「テディー」におけるテディーの前世で解脱(げだつ)に失敗したエピソードや、シーモアがミュリエルに送ったはずだと推測している詩の解釈を巧みに利用することで、かなり説得力のあるものになっている。また、性欲や女色は解脱にとって障害となることはよく知られている。だからこの解釈は、一般論としては、私たちにとって理解しやすいものだ。

しかしこの作品において、シーモアが自分の性欲の強さに悩む姿も、妻の色香に心をまどわす姿もまったく描かれていない。描かれていないことから引きだされた推測は、作品の解釈としてはもちろん信頼できない

い。そのうえ解脱を求める者が、性欲や女色から逃れるためだけに、自殺をするだろうか。そもそも解脱を求める意志とは、より良く生きようとする意志から生まれたものだ。かりに雪山童子のように、偈（げ）を聞くために、わが身を捨てようとしても、それはより良く生きようとする意志の現れだ。しかもほんとうに解脱を求めている人が、妻の寝ている隣のベッドで、むごたらしく血まみれになって死ぬのを選ぶだろうか。さらに、見てもいないバナナフィッシュについて、嘘をつくシビルは、シーモアの実存を震撼させるほど「無垢な」少女なのだろうか。こうした根本的な疑問にも答えていないので、この解釈も説得力に欠けている。

また先の解釈では証明の一部に使われていたリルケの詩を、解釈の中心にすえた研究もある。リルケの詩の中でも『ドゥイノの悲歌』を引用し、その悲歌が人間であることの限界を越えようと渴望し、結果的に失敗せざるをえない人間の姿を描いていると主張する。そしてシーモアがその詩人のことを「今世紀でただ一人の偉大な詩人」と語っているから、シーモアがその悲歌と同じ考え方をしていると推測する。つまりシーモアの自殺の原因を、「愛にたいする異常な能力に恵まれてこの世に生まれてきたシーモアは、愛への過剰な憧れを持ったが、人間は不完全な生き物であるから足をすくわれてしまい、死なねばならなかった」と説明するのだ。<sup>(14)</sup>

ところで「今世紀でただ一人の偉大な詩人」の一節は、文学にまったく無関心なミュリエルに詩集を読ませようとして、シーモアが言った言葉なのだ。そもそも、文字通りに取るべき言葉なのだろうか。しかもその言葉のみから、他ににも証拠がないのに、その「偉大な詩人」を詩人リルケと決めつけている。さらにその詩集は、初心者に適當だとはとても思われな、難解なことで知られている『ドゥイノの悲歌』である



と決めつけている。そのうえ、シーモアが最大の替辞を呈しているから、その詩に書かれた考え方と同じ考えをシーモアが持っていることと決めつけている。これらは予断だと言わねばならないだろう。また紙幅のほぼ半分を詩の解釈に使っていることから明らかなように、シーモアの死の原因をリルケの悲歌に求めることに終始しているという印象はぬぐえないのである。

さらに「異常な」性欲の観点から、シーモアの死について考察したものがある。シーモアのシビルへの接触やキスに注目して、それがごく普通の愛情表現を越えていて、ピーダフィリア (pedophilia: 子供や幼児に対する大人の異常性愛) の域に達している。シーモアは自分のその異常な性向を、シビルの無垢な反応によって痛切に意識して、自殺を決意したと考えるのである。その証拠として、短編「一九二四年ハッピーウィーク」を援用して、シーモアが子供のときに性欲を持っていたこと、また『大工よ、屋根の梁を高く上げよ』を援用して、子供のときのお気に入りの子シャロットと妻のミュリエルが酷似していることを指摘する。<sup>(15)</sup>

たしかにフロイト以降では、子供のときから性欲を持っていることは常識だ。しかし子供のときに性欲を持っていたことが、大人になってから子供を性愛の対象として見てしまう性向の証明にはならない。またもちろん、子供のときに好きだった女の子と、子供のときの妻が似ていることが、大人になってからも子供を性愛の対象として見ざるをえない性向の証拠にはならない。さらに気になるのは、シーモアのシビルへの接触やキスが、子供への普通の愛情表現を越えたものであることの証明がない点だ。セクハラには絶対的な基準などありえないだろうから、断言はできないのだけれども、私には、ごく普通の愛情表現に思えるのだ。以上から、この解釈も思いつきの域を出るものではないと考える。

シーモアの死について、いくつかの特徴ある解釈を検討した。しかしそのどれもが、私たちをじゅうぶん納得させるものではない。

### 冒頭の八つの謎

「バナナフィッシュに最適の日」の解釈で、たんなる思いつきではなく、作品の新しい面白さを指摘する解釈はもはやありえないのだろうか。作者サリンジャーの仕掛けた「シーモアの死の謎」にこだわりながら、思いつきをじゅうぶんに論証し展開した、新しい解釈はありえないのだろうか。じっくりと読めば、それは可能だと思われる。

この作品でまず最初に登場するのが、ミュリエルである。そこでミュリエルについて考えてみよう。彼女について、次のように解する研究者がいる。

……純粋な生命からおのずからにじみ出てくる芳香ともいうべき詩情に対する趣味や理解力には乏しいけれども、その代わりに実生活の面では、忍耐強く、そつのない行動家である。時間も有効に使い、何事をするにもてきぱきして、髪や爪の手入れに至るまで、身づくろいには細心の注意を払い、「セックスは楽しみか、それとも苦しみか」(“Sex Is Fun — or Hell”)という、小型婦人雑誌に掲載されている論文にも眼を通して、心に何か離れがたい苦悶をいつもいだいているように見える夫のシー

モアを、セックスで喜ばせることができるものなら……と気を配っている、実際的な、よき妻である。<sup>(16)</sup>

このミュリエル像は、禅に精通している研究者ならではのものである。おそらく研究者自身が禅の修行者であると思われる、けがれなき魂の生み出したミュリエル像だ。その意味で、我が汚れてしまった魂を振り返るとき、ある種の羨望を禁じえない解釈ではある。

しかしこのミュリエル像は、この研究者の浄化された魂を反映したミュリエルであって、現実のミュリエルではない。実像は、もう少し別の印象を与える女性である。

この作品は次のような一節から始まる。

ホテルにはニューヨークの広告業者が九十七人もいて、長距離電話を独占していたため、五〇七号室の若い女は電話がかかるまで正午から二時半ごろまで待たねばならなかった。もともと、その時間を無駄にはしなかった。ポケットサイズの婦人雑誌の「セックスは喜びだ、だが地獄か」という記事を読んだ。櫛とブラシを洗った。ベージュのスーツのスカートのシミを取った。サックスで買ったブラウスのボタンの位置をつけかえた。ホクロに新しく生えてきた二本の毛を毛抜きで抜いた。交換手がやっと彼女の部屋を呼び出したとき、窓際の椅子に座って、左手の爪にマニキュアをもう少しで塗り終えるところだった。<sup>(17)</sup>

さすがは短編の名手の冒頭の段落だ。私のつたない訳を通してすら、その文章が簡潔で印象深いのが分か

る。情景もいきいきと浮かんでくる。

だから先の研究者も、この印象深い冒頭の段落から、引用したようなミュリエル像の多くを導きだしたのだと思われる。この部分だけを読めば、そのように読めないこともない。たしかに「もっとも、その時間を無駄にはしなかった」と、語り手も語っている。だから「忍耐強く、そつのない行動家である。時間も有効に使い、何事をするにもてきぱきしていて」と解されたのだろう。

しかしもう少し注意深く読めば、文章は簡潔で明晰だが、読者を作品に引き込む仕掛けがどこかされていないことが分かる。いろいろな疑問や謎を抱かせることで、読者を作品世界に一気に引き込んでいるのだ。たとえば、つぎのような疑問や謎がある。

- (1) なぜ、広告業者は九十七人なのか。
  - (2) なぜ、部屋は五〇七号室なのか。
  - (3) なぜ、「若い女 (the girl)」なのか。どうして「彼女」や「若妻」や「ミュリエル」や「グラス夫人」ではないのか。
  - (4) なぜ、電話をかけたのが「正午」なのか。
  - (5) 「もっとも、その時間を無駄にはしなかった」とは、どういう意味なのか。
  - (6) なぜ、ミュリエルは「セックスは喜びだ、だが地獄か」という記事を昼間から読んでいるのか。
  - (7) なぜ、「櫛とブラシ」を最初に洗ったのか。ホクロの毛を抜いた後でも良かったのではないか。
  - (8) なぜ、昼間からマニキュアを塗っているのか。
- 少しいねいに読むと、このような疑問や謎がわいてくる。そこでそういう疑問や謎を念頭におきながら、

もう一度読み返してみよう。

すると、電話を待っている間のミュリエルの行動には、一貫した特徴があることが分かる。まるで一人でホテルに泊まっているようなふるまいだ。しかも彼女がしたことは、雑誌を読んだことを除けば、すべて自分を美しくみせるための行動だ。外面的な自分の姿にだけ関心がある利己的な女の姿が明らかになっている。

また「ポケットサイズの婦人雑誌の記事 (an article in a women's pocket-size magazine)」は、先の研究者が解するような「論文 (article)」と呼べるような真面目なものではなく、おそらく性欲を刺激するだけの扇情的な読み物である。(そんなことが推測できる私は、もちろん汚れた悲しい存在である。) だからその記事のタイトル「Sex Is Fun — or Hell」も、「セックスは楽しみか、それとも苦しみか」と訳すべきではなく、もっと扇情的に「セックスは喜びだ、だが地獄か」とでも訳すべきだ。ダッシュを無視して訳してはいけない。

さらにそんな劣情を刺激する雑誌をまず読んでから、櫛やブラシを洗うという順序は、彼女の「時間も有効に使い、何事をするにもてきぱきして」いるという性格を表しているだろうか。私にはそうは思われない。とすれば、中川敏氏が「もっとも、そのあいだ彼女は時間をうまく使っていたのだが」と訳し、私がとりあえず「もっとも、その時間を無駄にはしなかった」と訳している「She used the time, though.」は、先の研究者が主張しているように「時間を有効に使っていた」という肯定的な意味合いにだけ取るべきではない。「もっとも、時間つぶしはしていた」という程度の皮肉な意味合いをも含めて使われていると考えるべきだ。

私のような理解は率直さに欠けている。それは確かだ。しかし冒頭に続く三つの段落を読めば、禪師のよ

うな率直で純粹な心ではとらえきれない女性の姿が明らかになる。第二、第三、第四段落はつぎのように語られている。

彼女は、電話のベルで、なにかを途中で止めるようなたぐいの女ではなかった。おんなになってから、ベルはずっと鳴り続けているかのごとき様子だった。

電話が鳴っているあいだも、小指の爪に、丸みを強調して、小さなブラシでマニキュアを練りかえし塗っていた。それからマニキュアのビンのふたを締めて、立ちあがり、塗りたての左手を空中で前後に振った。乾いていた方の手で吸殻の一杯つまった灰皿を、長椅子から電話機のあるナイトテーブルの上に運んだ。きちんと整えられたツインベッドの一方に腰掛けた。電話を取ったのは、五回か六回目の呼び出し音のときだった。

「もしもし」と、左手の指を大きく広げたままで、指が白い絹のバスローブに触れないようにしながら言った。バスローブは、スリッパを除けば、彼女が身に着けている唯一のものだった——指輪はバスルームにあったのだ。(3-4)

ここまで読み進めば、普通の既婚者なら、ミュリエルが「実際のな、よき妻」であるとは断言できないだろう。電話が鳴っていても、まったく気にせずマニキュアを塗り続けている。しかも塗り終わっても、急ぐ様子はまったくくない。手をヒラヒラと振り、マニキュアを乾かしながら、まずタバコを吸う準備をしてから受話器を取る始末だ。アメリカの電話の呼び出し音は、日本のとは違って、一回の長さもその間隔も長いか

ら、五回目の呼び出し音でもかなりの時間が経過している。これだけでも、彼女の自己中心的な性格がよく分かる。

さらに、灰皿が吸殻で一杯なのもぜんぜん気にしていない。吸殻を捨てる機会は、これまでにいくらかでもあったはずである。そのうえ吸殻が一杯の状態、机の上ではなく、長椅子の上にそれまで置かれていたのだ。ホテルの長椅子だから、おそらく高級な布張りだったはずだ。人の座る布張りの椅子の上に、吸殻一杯の灰皿を置いていても平気なのだ。灰も飛び散っているはずだ。鈍感で、ずぼらな性格がよく表れている。

ここで短編「テディー」の中の一シーンを思い起こしておくのも悪くはないだろう。テディーは、両親のツインベットのあいだの床(！)に置かれていた吸殻の入っている灰皿を、ナイトテーブルのところまで運び、ナイトテーブル上に散らばっている灰や吸殻を自分の腕や手でぬぐい、きれいに掃除してから、灰皿をナイトテーブルの真ん中に慎重に置いた<sup>(19)</sup>。この行動は、当日の自分の死を予期(あるいは決意)していたテディーの、両親に最後の別れを言葉でいう代わりに行為であった。テディーの几帳面で思いやり深い性格と、がさつでだらしない両親の性格とを象徴するシーンである。このように、作者サリンジャーにとっては、吸殻の入った灰皿は、たんなる灰皿ではなく、象徴性の高い小道具なのだ。

灰皿であきらかになったミュリエルの性格は、スリッパとバスローブしか身に着けていないことから強調されている。少なくとも二時間半、パンツすら着けずに、うろろうろしていたのだ。(明言されていないが、指輪を外していたことまで語られているのであるから、パンツを穿いていたとは考えられない。) いわば全裸の状態、雑誌は読むし、ボタンもつけかえている。いくら保養地のホテルでも、やはりこれはだらしない行動だ。

しかも指輪（複数）がバスルームに置かれていることを考慮すれば、おそらくミュリエルは入浴した後、そのままバスローブだけを羽織っていたのだと推測できる。とすれば、唐突な感じがした「櫛とブラシを洗った」のも納得がいく。また入浴後、間がないと考えれば、その後の毛抜きやマニキュアを塗る行為も、じゅうぶん理解できるものとなる。逆に言えば、それら一連の行動は、先の推測の状況証拠になるだろう。

彼女の一連の行動が、入浴後まもなくのものであるなら、彼女は、いったい何時ごろ起きたのだろうか。多くのアメリカ人のように、彼女も起床直後に入浴したとすれば、起床したのは昼前だったと考えられる。そう考えるには、次のような理由がある。まず、彼女は前夜に電話をすることを母親に約束をしていたのに、正午に初めて電話をしようとしたこと。何らかの事情があって、前日の夜に電話がかけられなかった。だから広告業者が九十七人もいて電話が混んでいるのが予想でき（？）ても、入浴を済ませるとすぐに電話を申し込んだと考えるべきだからだ。つぎに、朝に起床していて、バスローブだけで午後二時半までいるというのは考えられないことだからだ。さらに、正午以前のミュリエルの行動については、語り手が何も語っていないことが挙げられる。

昼前に起きるのが「だらしない」とは、一概には言えないが、今回の旅行のおもな目的がシーモアの精神的な休息と保養であったことや、シーモアはすでに一人で海岸に出ていることや、いつまでもパンツすら穿かないことを考えれば、やはりだらしないミュリエルの性格を表している。

さらに言えば、ミュリエルがいつまでも下着を着けないことは、彼女の性的なだらしないさをも暗示している。こういうことを言えば、「セクシスト（性差別主義者）！」と非難されそうであるが、これは、私の個人的な頑迷な感情ではなく、語り手が読者に伝えようとしている含意（コノテーション）である。



それを説明したい。下着を着けていない若い女性が、ホクロに生えている毛を抜き取っている情景は、じゅうぶんエロチックである。また第二段落の拙訳「おんなになってから」は、「ever since she had reached puberty」を訳したものである。ここでとりあえず「おんなになって」と訳した puberty は、「思春期」だけでなく「破瓜（はか）期」の意味もあり、さらに語源にあたる pubes（恥骨部、陰毛）をも連想させる。性的な含意の強い言葉である。コンテキストから考えれば、これは「ずいぶん長い間」の意味を表せばいいのだから、表現とすれば無数の選択肢があった。けれども語り手は、この言葉をわざわざ使っている。ミュリエルの性的な面を強調しようとしているのだ。

さらに語り手は、ミュリエルが「セックスは喜びだ、だが地獄か」という扇情的な雑誌記事を、何よりも優先して昼間から読んでいたと語る。ミュリエルがセックスに強い関心を持っている女であるか、あるいはセックスを求めている女であることを暗示しようとしている。

そのうえ語り手は、バスローブだけのミュリエルが、電話中、「足を解いたり」(9)「また組んだり」(10)することを、あえて語っている。男の視点からに過ぎないのではあるが、じゅうぶんに性的な場面だ。

ある女性の性的な面を強調して描くことは、その女性が性的に奔放であることを暗示している。だからミュリエルのこうした行動の描写は、少なくとも、この作品が書かれた一九四八年のアメリカでは、性的にもだらしな性格を暗示していた。

じっさい語り手も、ミュリエルのことを「Miss Spiritual Tramp of 1948」(5)と、シーモアに呼ばせている。若い夫婦間での呼び名であるから、表面的には「一九四八年度の女性版の気高いトランプさん」程度の意味を伝えているのかもしれない。(トランプは、山高帽とドタ靴でステッキを持ったチャップリン映画の

主人公の浮浪者の名前である。) ただし義母が以前の呼び名を「ひどい (awful)」(5)と言っていることを考慮すれば、もう少しひどい「一九四八年度の精神的放浪者の女王」の意味をも伝えていたかもしれない。しかし読者は、「トランプ (tramp)」には、「放浪者」だけでなく「身持ちの悪い女、売春婦」の意味があることを知っている。だから、先の呼び名に「精神的にだらしない身持ちの悪い一九四八年度の女王」の意味を読みとることができた。

また、語り手は、「指輪 (rings)」がバスルームに置かれたままになっていることを語る。その複数の指輪には、とうぜん結婚指輪が含まれている。結婚指輪がバスルームに置かれたままであることを、間接的とはいえ、あえて言明しているのだ。夫のことをまったく気にしていないミュリエルの姿を語り続けていることを考え合わせるなら、語り手の意図は明白だろう。結婚した相手のシーモアから、ミュリエルの心と体が離れていることを表そうとしている。

ところでミュリエルは、なぜ約束していた昨夜に、母親に電話しなかったのだろうか。それは出来なかったからだ。母親に電話をかけるべき時間内には、部屋に戻っていなかったのだ。母親のいるニューヨークとマイアミは、同じ東部標準時に属しており、その間に時差はない。とすれば、ミュリエルは夜遅くまで部屋を空けていたのだ。おそらくホテルのバーで深夜まで飲んでいたのでだろう。

そう考えるには理由がある。まず、彼女自身が昨夜バーで飲んでいたことを母親に告白しているからだ。しかも一緒に飲んだ相手がいつでも「一日じゅうバーにいる」(8)男なのだ。そういう酒好きの男とバーで飲めば、深夜になることはよくあることである。また、そのときミュリエルはシーモアと一緒にではなかったから。シーモアは「ここにいる二晩ともピアノを弾いていた」(7)のだ。一人でバーにいた彼女はなかなか席

を立つことが出来なかつただろうと想像できる。つぎに、シーモアが海から戻ってきたとき、彼女は熟睡して、シーモアが戻ってきたことにさえ気づいていないからだ。昼間から熟睡しているのは、夜にじゅうぶん睡眠がとれていなかったからだと考えるべきだ。以上から、彼女は昨夜ホテルのバーで遅くまで飲んでいたと考えられる。

シーモアは、戦争で精神的な打撃を受けて、軍の病院に入院していた。ところが退院できたので、保養と休養のために、このホテルにやって来た。そういう状況を考慮すれば、ミュリエルのこの行動は誉められたものではない。また、知り合つて間もないアル中気味の男と、バーで深夜まで過ごす若い人妻の姿は、一九四八年当時のアメリカでは、性的にだらしないだけでなく、妻としては不適切な女だと見られていたと考えられる。語り手もそのように考えていたはずである。

とすれば、語り手が、ミュリエルを語るとき、「彼女 (she)」という単語さえできるだけ使わずに、最後まで「若い女 (the girl)」で押し通しているのが理解できる。なぜ冒頭の段落で、ミュリエルを「若妻」とか「グラス夫人」とか呼ばずに、「若い女」と呼んだのか理解できる。彼女が「妻」とか「グラス夫人」と呼ぶにふさわしいふるまいをしていない、と語り手は考えているのだ。

日本語の「ギャル (gal? > girl)」が持つニュアンス程ではないにしても、英語の「若い女 (the girl)」にもニュアンスはある。(「若い女」という訳語では、そのニュアンスはもちろん伝わらない。) 作品の最後でミュリエルが熟睡している姿をも「彼女 (she, her)」という表現を使わず、あえて「若い女 (the girl)」を繰り返す語り手には、「若い女 (the girl)」の持つニュアンスへのこだわりがある。

そのニュアンスとはどんなものなのだろうか。同じ短編集の中に「愛らしき口もと目はみどり」という短

編がある。三〇歳前後の弁護士アーサーの妻のジョニーは浮気している。浮気相手は夫の同僚の弁護士リリーだ。作品の場面は、リリーの寝室。ここでも、ナイトテーブルの上の灰皿は「吸殻や吸差しが山盛り」<sup>(20)</sup>である。ジョニーとリリーは同じベットの中にいる。このとき、語り手は、ジョニーを「ジョニー」とは決して呼ばない。「若い女 (the girl)」をしつこく最初から最後まで繰り返して、「彼女 (she)」を使うのさえできるだけ避けている。ジョニーは結婚して「五年」<sup>(21)</sup>たっているようだから、ミュリエルの場合と同じく、「若い女 (the girl)」と呼ぶ必然性はない。つまり、夫を裏切っている妻を、あえて「若い女」と呼び続けることで、語り手のジョニーに対する批判的な気持ちを表している。

ここまでで、冒頭の段落で抱いた八つ疑問や謎のうち、六つまで、その解答や解答らしきものが見いだせた。あと、(1)なぜ、広告業者は九十七人なのか。(2)なぜ、部屋は五〇七号なのか。の二つが残っている。

なぜ、広告業者は九十七人なのか。という謎の答は、「数字のミステリー」という章を立てて数字の謎に蘊蓄 (うんちく) を傾けておられる田中啓史氏の著書にも見当たらない。<sup>(22)</sup> もちろん浅学な私には分からない。百人に三人ほど足りないぐらい大勢という意味か、といい加減なことを考えたりする。(たしかに、三とか八とかという数字は、ウソの三八といって、日本では、いい加減な数字の代表だ。)

さて、八つの疑問や謎の最後の「なぜ、部屋は五〇七号なのか」については、このエッセイのタイトルが「五〇七号室の謎」であることもあり、いまま少し解答を延ばしておきたい。

言うまでもなく、私の挙げた八つの疑問や謎やその解答が、冒頭の段落で見いだされる疑問や謎やその解答のすべてだとも、また完璧な一覽だとも考えていない。だがそれによって、短編作家サリンジャーの技巧

の一端は示しえたと思う。指摘したような疑問や謎を、最初の段落で読者に抱かせ、読者を作品の世界に一気に引き込むだけでなく、ていねいに読んでいくと、そうした疑問や謎の答がしだいにあきらかになる。しかもその答をさがしだす過程で、ミュリエルの人間像がしだいに鮮明な像を結ぶのである。見事な仕掛けである。

最後に、ミュリエル像をまとめておこう。ミュリエルは、うわべを飾ることに熱心で、鈍感でだらしない、ずぼらで、性的な女である。これは、もちろん語り手が語ろうとしているミュリエル像である。だから、その例証となる描写は、すでに挙げたもの以外にも多い。というより、これ以降もつづく。そしてそうした描写は、語り手の巧みな語りからなっている。まさに読みの快楽を味わえるところだ。

たとえば先の引用したシーンの続きでも、彼女が運んできた灰皿をナイトテーブルの上に置く様子を、「灰皿を置くための場所をナイトテーブルの上につくった (made room on the night table for the ash-tray)」(4)と語ることで、彼女のずぼらな性格を暗示しようとしている。テーブルの上がぐじゃぐじゃで、灰皿さえ置く場所がなかったのだ。シーモアがものを散らかしたまま外出していた可能性を指摘する人がいるかもしれないが、それは後で証明するようにはありえない。ミュリエルがテーブル上にもものを乱雑に置いていたのだ。さらに「かたづけした」などではなく、「場所をつくった (made room)」と語られているから、机の上のものを乱暴に押し退けて、むりやり空間 (room) をつくりだしたという印象を与える。彼女のだらしない性格がよく分かる。

## シビルとシビュラ

つぎに、この作品のなかで、もう一人の重要な登場人物シビル・カーペンターについて考えてみよう。

シビルにもやはり謎がある。その謎の一つに、彼女の年齢がある。四歳だと主張する人も、<sup>(23)</sup>四歳か五歳だと主張する人も、<sup>(24)</sup>五歳か六歳だと主張する人もいる。<sup>(25)</sup>四歳から六歳までの幅がある。

つまり語り手は、シビルの年齢を語っていないのだ。しかし年齢を想像させる描写がないわけではない。シビルは黄色のセパレートの水着を着ている。その水着について、語り手は「一方の布切れは、あと九年か一〇年は事実上必要がないようだった」<sup>(10)</sup>と語っている。だが、女の子の胸がふくらむのは、当時のアメリカでの正確な事情はよく分からないが、一〇歳前後だろう。とすれば、引用文の「九年か一〇年」の数字は、ほとんど意味がない。ブラの部分は、もうしばらく必要がないと言っているにすぎない。この引用文から年齢を推測するのは不可能だ。

おそらく多くの研究者は、シビルが対抗心を燃やしている少女シャロンが「三歳半」<sup>(14)</sup>と語られていることから推測したのだと思われる。シビルのおませな態度から、シャロンより少し年長だろうと推測したのである。しかしシビルの年齢に関して、かなりの研究者が、あまりにも無造作に具体的な数字を挙げすぎている。少なくとも、「語りえぬものについては、沈黙しなければならぬ」<sup>(1)</sup>などご大層なことを言わずとも、シャロンは三歳半と語られているのに、なぜシビルは何歳かが語られていないのかを、まず考えるべきであ

る。なによりも、語り手はシビルの年齢を語っていないのだから。

具体的な年齢をシビルに無造作に与えることは、慎重に年齢を語っていない語り手の意図に反する行為である。語り手は、年齢不詳の少女を語りたのだ。

たとえばシビルという名前も、その意図を表している。シビル (Sybil) は、もとは「Sibyl」と綴っていて、ギリシア神話の女予言者の「シビュラ」を表していた。シビュラはアポロより長寿を与えられ九九〇年間生きたとされるが、晩年は、身体が枯れしほみ蟬のごとく小さくなったとされる。この女予言者を意識して、語り手は、この少女をシビルと呼んでいる。語り手は、この小さくなった長寿すぎて年齢不詳のシビュラと少女シビルとを連想させようとしている。

なぜなら語り手は、シビルとの会話中に、エリオットの有名な詩『荒地』の冒頭の一節「記憶と欲望をなймаぜにして」(13)を、シーモアにつぶやかせているからである。『荒地』のタイトルの下には、このエッセイの冒頭にも引用した『サテュリコン』の一節が引用されている。語り手は、間接的ではあるが、シビルとシビュラとを連想することを読者に求めている。

年齢不詳の小さな女予言者とシビルとを連想させるためには、年齢不詳の少女の方が好都合だ。だからシビルは年齢不詳の少女なのだ。

またさらに、シビルをシビュラと連想させて考えると、謎めいていたシーンがあきらかになる。たとえばシビルは、コネチカット州ワリー・ウッドに住んでいると言う。それを聞いて、シーモアは、その住所を繰り返かえしたあとで、「きみには分からないだろうけど、それで何もかもはっきりしたよ」(14)と、シビルに答える。場面から考えれば、シーモアが、謎めいた返答で、シビルをからかい挑発しているのはあきらかだ。

しかし謎めているのも事実だ。だからこの部分から、田中啓史氏は、「ワーリー・ウッド (Whirly Wood)」を「ひとをぐるぐるまわす森」と解され、『ちび黒サンボ』との関連で、興味ある解釈を提示されている。<sup>(26)</sup>

だが、シビルとシビュラとの関連で考えれば、別の解釈も成り立つ。「ワーリー・ウッド (Whirly Wood)」の「whirly」は「(南極大陸にみられる) はげしいつむじ風」を表わす。また「whirl」は、動詞では「旋回する、渦をまく」を表し、名詞では「渦巻、つむじ風」を表す。また「wood」は「木材、樹林」を表す。だから「ワーリー・ウッド」は「風の渦巻いている森」の意味とも解せる。とすれば、シビュラにぴったりのだ。なぜならシビュラは予言を木の葉に書きつけていたが、後年はその葉も顧みられることなく、風に吹き散らされるままになっていた、という伝説があるからだ。<sup>(27)</sup> しかもシビルの姓は、カーペンターで「大工」を意味するから、材木を意味する「ウッド (Wood)」とは縁語である。

シビル・カーペンターと「ワーリー・ウッド」とのこの程度の関連を意識して、シーモアは「きみには分からないだろうけど、それで何もかもはっきりしたよ」と、シビルにからかいを込めて言ったとも考えられる。

しかしもう少し深読みすれば、別の解釈がなりたつ。上で解釈したように、シビルがワーリー・ウッドに住んでいることを知って、シーモアは、シビルとシビュラの深い関係を再確認できた。そしてシーモアがシビルに関心を持ったのも、シビュラへの連想からであったと、すなわち「私は死にたい」という言葉で有名なシビュラゆえであったのだと、自分で納得できた。「死にたい」と考えていたシーモアは、シビルに惹かれていた原因が、この時点で、シビュラの「私は死にたい」という言葉に起因することがはっきりと分かつ



た。だから「きみには分からないだろうけど、それで何もかもはっきりしたよ」と、シーモアは語ったと考  
えられる。ここでは、とりあえずこの解釈の可能性だけを指摘しておいて、つぎに進もう。

このように、シビルは年齢不詳の予言者シビュラと深い関係を持つ年齢不詳の少女であると、語り手によつて語られている。そんなシビルは、多くの研究者が前提にしているように、ほんとうに「無垢」なのだろうか。予言は、『マクベス』の魔女たちの予言のごとく、知恵と経験とレトリックと狡猾さがものを言う世界だ。「無垢」な予言者とは、もちろん意味が矛盾しているあり得ない存在だ。

たしかにシビルの背中の中肩胛 (けんこう) 骨は、「華奢 (きゃしゃ) で翼のような両肩胛骨 (the delicate, wing-like blades)」(10)と、天使の翼を想起させるように語られている。だからシビルは天使のように「無垢」だと考えるべきかもしれない。しかし「墮天使」もいることを指摘しておきたい。この反証(?)の他にも、シビルが「無垢」でない証拠が、いくつかある。その内のいくつかを指摘しておく。

まず、シビルの最初の言葉「もっと鏡を見て (See more glass.)」と「もっと鏡を見た? (Did you see more glass?)」(11)は、シーモアの名前「シーモア・グラス (Seymour Glass)」との掛け言葉である。言葉遊びだが、「シーモアに会ったの? 会いたいな」程度の意味をも伝えている。子供らしい言葉遊びではあるが、言葉遊びはレトリックであつて、装飾的で技巧的な言葉の使用だ。「無垢」な精神を表しているとは言えない。

またシビルは、海岸にいるシーモアに会いに行く途中で、わざわざ立ち止まり、崩れかけた砂の城に足を突っ込んでいる(11)。これももいたずらな子供らしい行動だが、破壊衝動の現れであつて、無邪気ではあつても、「無垢」な精神の発露とは言えない。

さらにシビルは、シーモアに会うとすぐに、「あの人はどっ？ (Where's the lady?)」と聞いている。唐突な質問だったこともあるが、シーモアも「あの人って？ (The lady?)」(12)と聞き返している。つまり、普通の質問ではなかったのだ。まず、会ってすぐに、相手の妻の居場所が気になるのは、子供らしいとは言えないからだ。さらに「あの人 (the lady)」という言い方は、子供らしい言葉使いではない。少なくとも「lady」を使うのであれば、定冠詞「the」ではなく所有格「your」を使って、「your lady (奥さん)」と言うのが普通だろう。「あの人」にはシビルのミュリエルへの対抗心を感じさせる。突き放した感じがある。恪気(りんき)すら感じるのは、私の考えすぎなのだろうか。だが、どうもそうではないようだ。

というのも、シビルはこれに続けて、話題をシャロンに移すからである。シビルは、シーモアがピアノを弾くとき、シャロンを隣に座らせていたのが許せないと言う。これからは、シャロンが隣に座りにきても押し退けるようにと、繰りかえし主張する。あきらかに、シーモアを独占したいシビルの姿がある。シャロンにたいする焼きもちもあきらかだ。こういうシビルの独占欲や嫉妬心の表出のしかたは、たしかに率直ではある。だが、その独占欲や嫉妬心は「無垢」な精神を表すものではない。

さらに、シビルのシャロンへの嫉妬心は、この場面で終わらないのだ。よく知られている『ちび黒サンボ』への言及の後でも、ふたたび繰り返される。シビルの嫉妬心が、たんなる気まぐれなものではなく、根強いものであることを表している。

トラは六匹」と言ったあとで、シビルは、突然、次のように、シーモアにたずねる。

「蜜鐵(みつろう)は好き？」シビルはたずねた。

「何が好きだった？」若者は聞き返した。

「蜜鑑よ」

「大好きだよ、きみもだろう」

シビルはうなずいた。「オリーブは好き？」と彼女はたずねた。

「オリーブ、もちろんだよ。オリーブと蜜鑑。この二つを持たずには、どこにも行かないよ」

「シャロン・リップシャツは好き？」シビルは聞いた。

「うん、大好きだよ」と若者は言った。「とくに好きのところはね、(……中略……) 意地悪したり、

いじめたり絶対しない。それがシャロンの好きな理由だよ」

シビルは黙っていた。

「わたしロウソク噛むのが好き」と、やっと口を開いた。(14-5)

ここでは、シビルの根強い嫉妬心があきらかになっているだけではない。彼女は、いわゆる「かまをかけている」のだ。相手が好きそうな「蜜鑑(ハチミツの固形の部分)」と「オリーブ」と順に聞いて、「シャロンが好き」と言わせようとしている。シビルは、シーモアの本心を聞き出すために、たくみに誘いかけている。相手を誘い込んで、うまくあやつろうとしている。これは、幼稚とはいえ、手管(てくだ)である。もちろん手管は、「無垢」な子供には似合わない。世慣れた大人にこそふさわしい。

また、シャロンが大好きだと言われ、その理由を説明されると、その理由がもっともなこともあり、シビルは沈黙するより仕方がない。シーモアがシャロンを好きだと言っているのを、シビルは直接的には否定は

できない。シーモアの言葉を、黙って受け入れるより他に方法がなかった。

しかし、しばらくの沈黙の後に、シビルは「わたしロウソク噛むのが好き」と言う。謎めいた言葉だ。とりわけ日本人には、前後と脈絡がないように思えて分かりにくい。だがここでは、ロウソクは、蜜蠟からできたロウソクを表しているのだろう。バターとの連想で蜜蠟が出てきたように、蜜蠟との連想でロウソクが出てきたのだろう。

だが、問題がある。日本の蜜蠟のロウソクは、色は蜜蠟の色をしているが、とても噛もうという気が起らない代物だ。でも、あえて蠟（かじ）ってみた。思っていた通りの味だった。また学生がヨーロッパで買ってきてくれた蜜蠟のロウソクは、噛んでみたが、食べられるようなものではない。噛んで美味しいものでもまったくくない。日本のものもヨーロッパのものも、あとで充分うがいをしなければならなかった。

アメリカのロウソクが特別でないとすると、シビルが「わたしロウソク噛むのが好き」と言ったことは、理解できるものとなる。彼女は、美味しくないものを噛むのが好きだと言っているのだ。シビルは、嫌いなものを好きだと言うことで、シーモアのシャロンが「好きだ」という言葉の意味を曖昧にしようとしている。あえて嫌いなものを「好き」と主張することで、シーモアのシャロンへの好意を曖昧にして、否定したかったのだ。シビルの独占欲と対抗心が生み出した不誠実な言葉である。「無垢」な心が生み出したものではない。屈折した嫉妬心が生み出したレトリカルな言葉だ。

シビルは「無垢」な子供でないばかりか、不誠実な言葉をしゃべっている。じっさいシビルは、よく知られているように、『ちび黒サンボ』のトラの数を「六匹」と言い、見てもいないバナナフィッシュを見たと言い、しかもバナナを六本くわえていたと言う。トラの数は記憶違いの可能性もないわけではないが、バナ

ナフィッシュとバナナとロウソクとに関しては、不誠実な言葉だ。はっきり言えば、シビルは平気で嘘をつく。予言者シビュラがそうであったに違いないように、シビルも断定的な口調で嘘をつく。もちろん嘘つきは「無垢」ではない。

ところでシビルは、なぜ「六」にこだわっているのだろうか。日本語では「六匹」とか「六本」とかと分かりやすく訳しているが、もとの英語ではすべてたんに「六 (six)」と言っているにすぎない。「シックス (six)」を繰り返しているのだ。そのうえ「六匹」にしろ「六本」にしろ、状況的には、「六」である必要はまったくない。どんな数字でもよかったのだ。「三」でも「八」でもよかったのだ。ところが、あえて「六」を繰り返している。

しかもシビルは、「シーモア・グラス (Seymour Glass)」と「シー・モア・グラス (See more glass) (もっと鏡を見て)」との掛け言葉をさかんに楽しむような少女である。とすれば「シックス (six)」と言いつながら、「セックス (sex)」を意識していたことはありうる。少なくとも深層意識では、「セックス」を意識していたから、あえて「シックス」を選んだのだ。そう読者には感じられる。嘘つきなシビルは性的な存在でもあるのだ。少なくとも潜在的には性的な存在であることが語られている。

以上から、シビルは「無垢」な少女などではなく、成熟した大人と変わらない資質をもった少女として語られていると言える。

## シーモアとシビル

シーモアは、大人と変わらない資質を持った少女として語られているシビルをどう考えていたのだろうか。シーモアとシビルのこの日の最初の出合いは、つぎのように始まる。シーモアは海岸で、巻いたタオルを目の上に乗せ、仰向けに寝ていた。そこにやって来たシビルが声をかけた。すると「はっとして、テリー織りのバスローブの衿(えり)へ右手をもっていった」(11)だけでなく、体を回転させて腹ばいになった。

青年が海岸でバスローブを着て日光浴をしている。ちょっと普通ではない。しかも声をかけられたとき、反射的に衿に手をもっていく。ここで「衿」と訳したもとの英語は「lapels」であって、「両衿(りょうえり)」の可能性も高い。両衿を右手でかたく締めようとしたと解する方が、シーモアの反射的な行動の意味は分かりやすい。バスローブでさらに体を隠そうとしたのだ。自分を隠す行為で、自己防衛的な行動だ。それは、無防備な仰向けから、腹ばいの体勢に変わったことにも現れている。

この最初の出合いでもあきらかなように、シーモアは自意識が過剰気味で、他人に対して自己防衛の傾向の強い人物だ。シビルにたいしても、防御的な姿勢をとっている。これはシーモアのたんなる性格とも言えるが、シーモアにはシビルが他人のように見えていとも言える。シビルにも心をかんぜんに許していない証拠でもある。

なぜシーモアは、少女のシビルにも心を許していないのだろうか。二人は一日か二日前に出合った。シビ

ルはわざわざ会いに来るほど、シーモアに好意を持っている。しかしシーモアにはシビルに対してなにか躊躇（ちゅうちょ）するものがある。

だからこそシーモアは、シビルに「きみのパパの到着を一時間ごとに待ってたんだ。一時間ごとだよ」(12)と言ったのだ。シビルが好意をもってしてくれるのはよく分かっているのだけれども、シビルにたいして、すこし耐えがたいものを感じていた。シビルとのつきあいにすこし負担を感じていた。それでシビルの父親が来れば、遊び相手をしなくて済むだろう、あるいは自分を必要としなくなるだろうと考えて、父親の到着をシーモアは待っていた。シーモアの本音がでた言葉だ。また、そう考えないと、この言葉は謎めいていて意図が理解できない。

このようにシーモアはシビルを全面的には受け入れていない。その原因は、何なのか。それはシビルの子供らしいふるまいの背後に、先にあきらかにしたように、レトリックや虚言や嫉妬心や性欲といった大人と変わらないものを、すでにわずかでも見いだしていたからだろう。シビルを純粹に無垢な子供と見なしていたら、シーモアは先のような対応はしなかったはずだ。

シーモアは、いわば大人びた子供シビルに、ある種の退廃と墮落をすでに見いだしていて、この日もそれを再確認できた。だからこそ、シビルとの会話の途中で、突然、世の中の退廃と墮落を描いている『荒地』を思いだしたのだ。また、『ちび黒サンボ』を読んだことがあるかと聞かれて、シーモアは「そんなこと聞くななんて、不思議だな。きのうの晩、読んだとこなんだ」(14)と、シビルをからかって嘘をつく。さらにシビルがトラは「六匹」だと間違いを言ったのを、訂正すらしない。シビルを純粹無垢な子供ではなく、嘘をも受け入れている「ソフィステイケートされた」子供と見なしているのだ。

同様のことが、他の対応にも見られる。たとえば先に引用した「オリーブと蜜鑑」。この二つを持たずには、どこにも行かないよ」というシーモアの返答も、からかいの気持ちを込めた、口からでまかせの嘘だ。またシビルが「わたしロウソク噛むのが好き」と言ったとき、シーモアは「嫌いな人なんていないよ」(15)と、シビルの嘘に嘘で答えている。さらにバナナフィッシュの話も、まるで本物の魚であるかのように、シーモアはシビルに話す。そしてシビルが一匹見たと言うと、まるでシビルの嘘を信じているかのように、さらに「バナナを口にくわえていた？」(16)と、聞き返すのだ。シビルの嘘にたいして、シーモアは嘘であることをまじめに指摘せず、嘘に嘘で対応している。

しかし「バナナを口にくわえていた？」という質問に、シビルが「六本」と答えたとき、さすがのシーモアも我慢できなかった。もうこれ以上嘘には耐えられなかった。だから目の前にあったシビルの片方の足をつかんで、「土踏まずにキスした」(17)のだ。シビルとの決別を表すキスだった。ユダのキリストへの接吻のように、いわば最後の別れを暗示するキスだった。

そのキスに、シビルは「コレ！(Hey!)」(17)と反応する。この場合の「Hey!」は日本語にしにくい。中川敏氏の「やめて！」<sup>(28)</sup>も良い訳だ。まねをして「やめてよ！」と訳したいぐらいだ。いずれにしても、私には、無邪気な子供が、くすぐったくて「キャキャ」と笑いながら、「やめて！」と言っているとは感じられない。大人の女が、セクハラ的な行為にたいして、「やめて頂戴！」と言っている感じがするのだ。たとえば『ライ麦畑でつかまて』のなかで、ホールデンは、はじめて出会った「三〇歳位」の女に、ダンスしながら突然、その女の髪の毛の分け目にキスをした。その時、その女が「やめてよ！なに考えてるのよ！(Hey! What's the idea!)」<sup>(29)</sup>と言ったのと同じニュアンスが感じられる。要するに、シビルの反応は大人びているのだ。こ



こでもシビルは大人びた子供である。そのことにシーモアは以前から気づいていた。

じっさいシーモアは、浮袋の上のシビルの両足に向かつて、「二つの気取り屋さん (Two snobs.)」<sup>(16)</sup>と呼びかけている。直接的には、少女のかわいい足にたいして、「すました気取り屋さん」と呼びかけている。しかし「snob」は、人にたいして用いられるときには、「俗物」とか「お高くとまっている人」とかを意味する。否定的な意味の強い言葉だ。その否定的な言葉を、間接的ではあるが、シビルにむけて使っているのだ。

だから「コレー」と言われたシーモアも、「きみこそ、コレーだよ (Hey, yourself)」と答えているのだ。もう嘘はたくさんだ、と言っている。また、だからそれに続けて、「さあ、戻ろう、もうじゅうぶんだろう」と言うのだ。「もうじゅうぶんだ」というのは、シーモア自身に向けた言葉でもある。「惜しむ気」<sup>(17)</sup>もなく別れたのは、ひとりシビルだけでなく、シーモアも同じであった。

大人びたシビルに、シーモアは多少うんざりしていた。そう考えると、シビルの父親の到着を待っているという言葉だけでなく、シーモアの他の言動も理解できる。たとえばシーモアは、シビルの水着はよく似合っていると一言いながらも、水着の色を間違っている。黄色の水着をブルーと言っている。これは、シーモアの狂気の徴候ではなく、シーモア自身が「ロイヤル・ブルー」<sup>(18)</sup>の水着を着ているから、たんにシビルの水着をよく見ずに言ったにすぎない。シビルへの関心が薄れているしるしだ。(ただし「ブルー」に注目すると、『ライ麦畑でつかまえて』<sup>(30)</sup>のなかで、ホールデンは回転木馬に乗ったブルーの服を着たフィービーを眺めることによって救済される。だからシーモアがシビルの水着の色をブルーと言ったことは、シーモアが自分の救済をシビルに託していた期待の無意識な現れと解せるかもしれない。なおシーモアがシビルに託し

ていた期待については、後で詳しく検討する。）

またシーモアは、シビルの話し相手になっていながら、シビルの言葉をよく聞いていない。会話そのものが上の空の場合がある。「つぎは、突き落としてね」「突き落とすって、誰を?」「シャロン・リップシャツよ」「ああ、シャロン・リップシャツね」(13)などはその一例だ。相手の話をよく聞いていないのは、多少うんざりして、相手にたいする関心が薄れているからにほかならない。

### 弱いシーモア

シビルとの関係で、シーモアの人物像はある程度あきらかになったが、ここでもう一度シーモアを中心に  
して考えてみよう。

先にミュリエルについて考えたとき、シーモアはナイトテーブルの上をぐちゃぐちゃにしたままで部屋を出て行くような人間ではないと断言した。まずそのことを証明しよう。

シーモアは、海水浴に来て海岸で寝ているときでさえも、バスローブの帯までしっかりと締めている。脱いだあと、ふたたび着るときも、「両衿をしっかりと合わせ」(17)で着るのだ。これらの行動だけでも、シーモアの神経質で几帳面な性格はあきらかだ。

さらにバスローブを脱いだあと、シーモアは「それをまず縦にたたみ、つぎに三つにたたんだ。目の上に乗せていた巻いたタオルを延ばし、砂の上に広げ、そのタオルの上に、たたんだバスローブを置いた」(13)の

だった。まるでダンスの中に入れるときのよう、きちんと三つにたたんでいる。そしてそれを、わざわざ広げたタオルの上に置く。しかも忘れてはいけないのは、場所は海水浴場で、行為者は若い男だ、という点である。着ていた服をたたんでいるヒーローを、アメリカ映画で見た記憶がない私には、シーモアが異常に几帳面で神経質に映る。

またシーモアが浮袋を運ぶときは必ず「脇の下」にはさむのも、彼の几帳面な性格を表している。さらに浮袋上のシビルが怖がって、「手を離さないで。ねえ、つかんでいて」と命令口調でいったとき、シーモアは「カーペンターのお嬢さん。お願いします、と言うものだよ。大丈夫だよ (Miss Carpenter. Please. I know my business.)」(15)と、論(さと)している。人に頼む場合には、命令口調ではなく、「お願いします (Please)」をつけ加えるのだよと教えている。几帳面な性格が現れている。こういう人物が、ナイトテーブル上にものを乱雑に置いたまま出ていくことはありえない。

シーモアは、このように几帳面で神経質な若者である。つぎにその外見について考えてみよう。容貌は「青白く (pale)」(10)で、「肩幅は狭くて白い」(13)青年だ。色の白いことが二度も強調されているほど色白で、肩幅も狭い。貧弱な肉体だ。(別の作品では、シーモアは「並はずれて手足のひよる長い」<sup>(9)</sup>印象を与える男だったと語られている。) そのうえ髪のも「薄い」(12)。そしてわずか二日間で二人の少女に好意を持たれるのだから「やさしい」雰囲気を持っていたはずだ。さらにアメリカ人にしてはめずらしく外国語(ドイツ語)が堪能で、詩の愛好家でもある。一言でいえば、「やさしき青白きインテリ青年」である。殺戮(さつりく)の場である戦場で、精神的な打撃を受けたのも、じゅうぶん理解できるタイプの人間だ。

一方、アメリカという国は、デイヴィ・クロケット (1786-1836) の昔からジョン・ウエイン (1907-

(79) が演じたヒーローたちにいたるまで一貫して、筋肉質で暴力的でマッチョな男をヒーローと見なしてきた。マッチョな男をヒーロー視する伝統は、暴力そのものである戦争の直後の一九四八年のアメリカでは、強まることはあっても、弱まることはなかったはずだ。そんな時代にシーモアは生きていた。

「やさしき青白きインテリ青年」であるシーモアは、アメリカン・ヒーローの伝統とは対極にある人物だった。アメリカの文化的伝統の中では、世間から英雄視されることなど絶対でない青年だった。むしろ世間の冷たい目を感じざるをえないタイプの人間だった。シーモアが自己防衛的な姿勢をつねにとる理由がここにある。別の作品中ではあるが、シーモアはもし戦争が終われば「死んだ猫」<sup>(32)</sup>になりたいと言っている。これもシーモアの自己防衛的な心根の現れだ。

シーモアは、海水浴場にいるときさえも、バスローブの両衿をしっかりと合わせ、帯までしっかりと締める。この行動は、たしかにシーモアの神経質で几帳面な性格を表している。だがあきらかに、自分自身を世間の目から隠そうとしているのも事実だ。じっさい、シーモアはホテル客専用の浜からわざわざ出て行き、ホテルから離れた海岸で日光浴をしている。この奇妙な行動は、シーモアが世間の目から自分自身をできるだけ隠そうとしていると考えないと、理解できない。シーモアは、他人の目を避けたがっている自意識のつよい男だ。

青白くて貧弱な肉体で髪の毛の薄い男。(髪の毛は、サムソンの例でも分かるように、生命力や強さの象徴である。) しかも神経質で几帳面で自意識のつよい男。これは、アメリカのマッチョ文化のなかでは、「弱い (weak)」男の典型的な姿である。シーモアは「弱い」男として語られている。

ところで、サリンジャーの他の短編に、みずから「私は弱い (I'm weak.)」<sup>(33)</sup>と語る男がでてくる。先に

言及したアーサー弁護士だ。アーサーも、シーモアと同じく戦争に行っていた。そして歳も三〇歳前後の若い男だ。そのアーサーは、自分は「凶体のでかい無口な奴 (big silent bastard)」<sup>(34)</sup> などではなく、「弱い」男だと、同僚のリーに繰り返かえし嘆いている。ところでアーサーの場合、「弱い」のは、たんに筋肉的に弱いだけでなく、性的にも弱いことを表している。貧弱な身体を嘆くことで、性的な無能を嘆いている。アーサーは妻を性的に満足させられないことを、「私は弱い」と言うことで、告白している。妻とセックスできない状態を「弱い」という言葉で表している。そして相談相手のリーもその意味を理解している。

暴力的で筋力のあるマッチョな男が性的にも強い、というのは迷信にすぎないはずだ。しかしその迷信は根強い。現代でも影響力の強い迷信だ。ジェームズ・ボンドは女にも強いのだ。逆に言えば、シーモアのように「弱い」男は、性的にも「弱い」ということになる。シーモアの「弱さ」が強調して語られているから、シーモアの性的な「弱さ」が強く暗示されているとも言える。

結婚直前のシーモアの姿が、『大工よ、屋根の梁を高く上げよ』では語られている。それによると、「(シーモアは) 潜在的なホモ (a latent homosexual) であって、基本的に結婚を恐れている」<sup>(35)</sup> という無責任な噂があると語られている。またシーモア自身も日記に、婚約者ミュリエルの肉体を要求しないから「私はどこかヘンなのだ (something 'wrong' with me)」<sup>(36)</sup> と思われると書きつけている。以前から彼は性的な男ではなかった。結婚前から、彼は世間の「弱い」男のイメージを裏切る存在ではなかった。

では、結婚後、戦争で精神的なダメージを受けたあとの、シーモアの性的な能力はどの程度なのだろうか。常識的には、精神的な打撃は、男の性的な能力にマイナスの影響を与えるものだ。だが、この作品は、都会的な洗練を特徴としていた『ニュー Yorker』誌に発表されたものだから、性的な能力は直接的にはもちろ

ん語られていない。しかし推測する材料がないわけではない。

たとえば、ミュリエルは昨晚ホテルのバーで一人で酒を飲んでた。そしてミュリエルは、シーモアが二晩ともピアノを弾いていたと、母親にわざわざ語っている。この二つのことを考慮するなら、シーモアとミュリエルとの夜が充実したものであったとは考えられない。しかもマイアミの保養地に来ていながら、シーモアが一人きりで海水浴に行っているし、ホテルに残っているミュリエルも、どうでもいい些事をして、そのあとは眠っている。ミュリエルがホテルに居残っている必要性も必然性もまったくない。二度目のハネムーンともいえる「数年ぶりの休暇」(7)の三日目としては、二人の行動は異常だ。二人は異常にバラバラなのだ。

そのうえミュリエルは、昼間から雑誌のセックス記事を読んでいる。性的に満足していたら、ふつうは起き抜けて劣情を刺激するだけのセックス記事を読まないものだ。とすればこのホテルに来てから、ミュリエルとシーモアとの間にセックスがあったとは思われない。

さらにシーモアは、病院から退院してからも樹木にたいして「不審な行動」(5)をしたことが語られている。その不審な行動の一つが、木に車をぶつけることだった。シーモアは木にたいして攻撃的になっているのだ。これは、木が「生命の樹」を象徴していると考えると、シーモアの「死にたい」気持ちを表している。また心理学的にみると、これは、ミラー<sup>(37)</sup>やブライアン<sup>(38)</sup>が示唆しているように、木が象徴しているペニスへの敵意とも解せる。シーモアが性的に不能であるから、乞立しているペニス(立木)に敵意を持っているのだとも考えられる。シーモアも、弁護士アーサーと同じく長い間、妻に性的な満足を与えられなかったと考えられる。そうであるなら、語り手によって強調されているシーモアの「弱い」イメージとも合致する。

また語り手が語るシーモアの自殺の場面も、シーモアの性的な弱さを暗示している。語り手は、シーモアがピストルを「パンツとシャツの重ねてある下から」取り出し、弾倉をとりはずし点検し、「ふたたび入れた (reinserted it)」(18)と語る。ピストルにペニスの含意を持たそうとしている。そのうえで「彼は銃の撃鉄を起こした (He cocked the piece.)」(18)と語る。ここで使われている英語の「piece」は「性器」をも意味し、「cock」は「ペニス」を意味するとともに、動詞としては「立てる」を意味する。だから先の「彼は銃の撃鉄を起こした」という文は、「彼はペニスを立てた」という意味をも表している。そのあとシーモアは「ベッド」に座り、隣のベットで寝入っている「若い女(=妻)の方を見て」(18)から、銃を自分のこめかみに向けて引き金を引いたと語られている。シーモアはベットの妻を見ただけなのだ。

つまり語り手は、シーモアが最後の瞬間にはじめてペニスを立てることができたこと、しかしそのペニス(ピストル)は、ベットの中の妻の役には立たなかったことを、皮肉な口調ではめかしている。

さて、少なくともホテルに来てから、二人の間にセックスがなかったとすると、なぜ二人は五〇七号室に泊まっていたのかが分かる。五〇七号室の謎が解ける。五〇七号室では、あるべき六(six)が〇(ゼロ=無)なのだ。五六七と続くべき数字が、五〇七となっているのだ。その部屋では、あるべきシックス(six)、すなわちあるべきセックス(sex)が無(ゼロ)だった。二人の間にセックスがなかったことを象徴するために、語り手は二人を五〇七号室に宿泊させたのだ。

たんなる語呂遊びだ、と思われるかもしれないが、この作品は語呂遊びに満ちている。それに、そう考える根拠がないわけではない。

一つには、自然数としては五、六、七と続くのが自然だからである。つぎには、シーモアが自殺のとき

使った拳銃が口径七、六五ミリのオートギーズだったと語られているからだ。七六五と数字が続くことが強調されている。三つ目には、オートギーズはふつうオートギーズ25とかオートギーズ380とか呼ばれて、テキストのように「オートギーズ七、六五ミリ口径自動拳銃」(18)と呼ばれることはまれだからだ。意図的に、五六七という数字を強調しているのだ。

そのうえたとえば、マニア向けの『世界のハンドガン』(『月刊Gun』別冊)という本にさえ、オートギーズは25と380のみが記載されている。<sup>(39)</sup>つまり口径六、三五ミリと口径九ミリの二種類しか記載されていないのだ。この作品中で使われた口径七、六五ミリのオートギーズは載っていない。そこで問い合わせたところ、同誌の編集部でさえも、口径七、六五ミリのオートギーズの存在は確認できないそうである。(ただし赤瀬信吾氏のご教示によれば、米国の一九〇三年製の拳銃コルトM1903のコピー・モデルとして、七、六五ミリのオートギーズは存在したようだ。尚、この作品の場面は一九四八年の設定だから、少し旧型すぎるという気もする。) いずれにしても、作品中の七、六五ミリのオートギーズは、先の25や380ほどポピュラーでなかったのは確かだ。

とすれば、あえて七、六五ミリの拳銃を選び「七、六五ミリ」と語ることで、語り手は、意図的に七六五という数を強調しようとしていると考えてもよさそうだ。そしてその強調は、五〇七号室で「六」が抜けていることを強調する以外の意図は考えられない。

これで冒頭の段落の八つの疑問や謎は、広告業者が九十七人であることの謎を除けば、すべて解けたことになる。



シーモアの死の謎

つぎに「シーモアの死の謎」について考えてみよう。シーモアは、先に検討したように、几帳面で神経質な性格をしている。そして貧弱な体をしていて、性的にも弱い。また、シビルとの関係であきらかになったように、大人の属性と考えられている独占欲や嫉妬心やレトリックや虚言や性欲を受け入れることができず、それらにたいして拒絶感がつよい。このようにシーモアは、もともとこの俗世間で生きていくのに適した資質の人間ではなかった。

しかも結婚した相手のミュリエルは、几帳面なシーモアの精神世界に関心がなく、物質的な虚栄心のつよいだらしない女性だった。シーモアも、ミュリエルのことを「精神的にだらしない売春婦 (Miss Spiritual Tramp)」ともとれる呼び方をしている。シーモアとミュリエルとは、心身ともにバラバラの状態にあった。二人の結婚生活はうまくいっていなかった。

しかし結婚生活がうまくいっていないから、人は自殺するわけではない。生きるのに絶望したとき、自殺するのだ。自殺直前のシーモアの心の内を考える必要がある。そのためには、シーモアが、死の直前に、シビルに語ったバナナフィッシュの物語が一つの手がかりになる。

バナナフィッシュは「とても痛ましい人生を送っている」(15)と、シーモアは語る。バナナフィッシュはバナナのたくさんある穴の中に入り込んで、バナナをたくさん食べて太って、二度と穴から出られなくなる。

穴の外にいるときには、普通の魚のようだったが、いったん穴の中にはいると、「ブタのようにふるまう」(16)のだ。そして最後には、バナナ熱にかかって死ぬ。たしかにシーモアの語るバナナフィッシュの一生は痛ましい。

この痛ましい一生は、資質が正反対の女と幸せでない結婚生活を送り、かつ社会との疎外感にも傷つき苦しみながら自殺にいたるシーモアの一生と重なるところがある。だからバナナフィッシュはシーモアを象徴していると解される場合が多い。

シーモア自身も、バナナフィッシュを「彼 (he)」で受けている。またシビルが「それら (them) バナナフィッシュ」はどうなったの?」と尋ねたとき、シーモアは「誰 (who) がどうなったって?」(16)と聞き返している。このとき注意すべきは、シーモアが無意識的に、人称の代名詞「he」や疑問代名詞「who」を使っている点だ。シーモアが、バナナフィッシュを人間と見なしていた証拠ではないだろうか。シーモアは、閉塞された穴の中で「痛ましい人生を送っている」バナナフィッシュと、物質的なアメリカ社会と愛しきれない妻に囲まれて息苦しく生きている自分の姿とを重ね合わせていたのではないだろうか。

だとすれば、バナナフィッシュはバナナ熱で死ぬ、とシーモアが語ったことが重要になる。このとき常識的には、悲惨な死の結末を少女に語る必要はない。ところがシーモアは、あえて悲惨な死を語っている。この事実と、シーモアの直後の自殺とを考え合わせれば、シーモアは、この時点で、自分の死を決意していて、その決意が「バナナフィッシュの死」となって現れでたと考えられる。

シーモアは自殺の決意を、バナナフィッシュの死で暗に告白しているとすると、自殺の決意はすでに以前になされていたと考えるのが自然だ。なぜならこの話は、シビルと会って間もなくされているのだし、これ

以前のシビルとの会話も大人の男に死をとつぜん決意させるような格別なものは何もないからだ。

つまりシーモアは、この日シビルに会う前から「私は死にたい」と思っていたのだ。(とすれば、シビルの住所ワリー・ウッドについて、私が先に示した「深読み」の解釈も、あなたがち牽強附会とばかりは言えないことになる。)そして「私は死にたい」と思いながらも、シーモアはシビルと出合い話を交わしている。

ではどうしてシーモアは、すでに「私は死にたい」と思っていたのだろうか。もともとシーモアは、先に指摘しておいたように、世の中でたくましく生きてゆくのに適したタイプの人間ではなかった。その「やさしき青白きインテリ」であるシーモアは、人が殺し合う戦場で、人間の心の闇や世界の悪を見てしまったと想像できる。その闇や悪の認識は、彼の繊細な神経には耐えられなかった。だからこそ、彼は一時的に精神の変調をきたし、軍の病院に入院しなければならなかった。彼を取りまく世界は、彼には耐えきれなかったのだ。またシーモアは、病院から退院したとはいえ、かんぜんに回復しているわけではなかった。義父母は、退院してからの彼の言動から、狂気の再発をしんげんに恐れているほどののである。このことは、彼にとつて、この世はまだ耐え難いものであったことを示している。この世は、できれば抜け出て行きたい所であった。言い換えれば「私は死にたい」と彼は思っていたと考えられる。

つぎに、シーモアは「私は死にたい」と思いながらも、どうしてシビルと出合い話を交わしたのだろうか。どうしてシーモアは、「きみを待っていたのさ」(III)と、シビルに言ったのだろうか。もちろん可愛らしい少女が、わざわざ会いに来てくれているのに、拒絶するほど、シーモアは異常な青年ではない。通常は礼儀も心得ている青年だ。しかしそれだけが理由でないように思える。シーモアは、シビルにある種の期待をしていたと思えるのだ。

シビュラは「私は死にたい」と言いながらも、生き続けなければならなかった。だが一方、シーモアは「私は死にたい」と思いながらも、生き続けるきっかけを見つけだしたかった。そう私は考える。生き物はほんらい生きたいという生命力を内部にもっている。シーモアは、シビルと出会うことで、自分の内部のその生命力が、刺激されて目覚めてくれることを期待していた。なぜならシビルは少女で、少女には新鮮な生命力が横溢しているからだ。そのうえシーモアは、シビルという名は「生き続けなければならない」シビュラから派生した名前だとおそらく気づいていたからだ。だからシーモアは、シビルを待っていたのではないだろうか。そして彼女と話を交わしたのではないだろうか。

短編「エズメ」では、精神的に崩壊寸前のアメリカ軍の軍曹が、少女エズメの純粋なまごころに触れることで救われることが暗示されている。『ライ麦畑でつかまえて』でも、やはり精神的に追い詰められていたホールデンは、無私の愛をそそいでくれる妹フィービーとの出会いによって、救われて落ち着く。このように、作家サリンジャーは、少女との出会いによって、救い出される人間の姿を描いている。その同じ作家によって描かれているシーモアが、少女に出合っているのだ。

であるならば、「死にたい」と考えていたシーモアが、少女シビルとの出会いに、一縷（いちる）の望みを抱いていた可能性はおおいにある。たしかにシーモアには、この一日か二日間の短いつき合いでも、シビルが純粋に無垢な少女でないことは分かっていたはずだ。だがそれでも、今日こそは、純粋な無私の愛の、たとえそのかけらであっても、少女シビルに見いだせるかもしれない。もし無私の愛が見いだせたら、それを刺激にして、生きる意欲が目覚めるかもしれない。そう考えて、シーモアはシビルを海岸で待っていた。

しかしシビルは、エズメでもフィービーでもなかった。シビルは、純粋な無私の愛ではなく、自己中心的

な愛しか示さなかった。シビルは、先に検討したように、いわば世俗の中で墮落した大人と変わらない資質しか示さなかった。

シーモアの期待は裏切られた。一縷の望みさえ断たれたのだった。「私は死にたい」という思いを抱いていたシーモアは、もはや生きる希望の火をかき立てることはできなくなった。慣れ親しんできた静かな絶望のなかで、最後の願いである「私は死にたい」を実現するための行動を起こすより仕方がなかった。この作品の最後の死の場面の静けさは、シーモアが長らくその絶望に慣れ親しんでいたかを示している。自殺を決行するシーモアは、平静そのものだ。

しかしシーモアは、部屋に戻るエレベーターの中では、感情を激しく波立たせる。それはなぜなのか。なぜシーモアは、自分の足が見られていると思って、乗り合わせた婦人に言い掛かりをつけたのだろうか。なぜ、婦人が怒って降りたあと「二本の普通の足なんだ。どうして皆がじろじろ眺めるのか、まったくわけが分からない」(18)と独り言をいって、感情をたかぶらせているのだろうか。部屋に戻ってからの、落ち着いた死の準備と実行の様子とは対照的に、この場面では、シーモアは激しく動揺している。シーモアの感情が激した唯一の場面である。

心理的にいえば、部屋に入る直前、つまり死の直前に、感情を爆発させておいたから、静かな気持ちで銃の引き金を引くことができたと言える。いかに長く慣れ親しんでいた絶望の終着点であったとしても、自殺には精神的な跳躍が必要だ。死への決断は激しさを必要とする。その激しさが、この異常なふるまいとなって現れたと考えるのだ。しかしそれだけでは、なぜ足なのか、という理由の説明にはならない。

シーモアが足や足首にとくべつな思いを抱いていたのは、シビルの足や足首にたいする執着ぶりからもあ

きらかである。ギリシア神話の英雄アキレウスの唯一の弱点は足首であった。このように、足は人間とってもっとも重要な部分であるし、弱点を示す部分でもある。それだけでなく、シーモアには、足にたいする特別な思い入れがあった。『フランシーとズーイ』のなかではあるが、シーモアは弟のブーブーに「利口というのはお前の持病で、お前の義足だ」と言ったと語られている。それに続けてブーブーも「(ぼくらは)他人にとつては足の不自由な人間なのだ」と語っている。このようにシーモアは、自分たちの精神的な特異性が足に現れると考える人間であった。

一方、死を決意していたシーモアは、自分が特異な精神状態にあることを自覚していた。現在の自分が「他人にとつては足の不自由な人間」であることを意識していた。だから自分の足に異常に過敏になつて、たまたま乗り合わせた婦人が自分の「不自由な足」を眺めて、その「不自由な足」の正体を見抜いている(あるいは、見抜くのではないか)と考え、恐れた。それでいつもの礼儀正しいやさしさを失って、婦人に足をじろじろ見るなど言い、先の引用のような独り言をいったのだ。

シーモアのこの唐突で激しい行動は、彼の狂気を表すものでもちろんない。また死の決意の動揺が生み出したものでもない。ただ死を目前にしての精神の激しい緊張が生み出したものだ。人は精神的に弛緩した状態で自殺の決断はできない。

ただしシーモアの死は、突然の激しい絶望が生み出した突発的なものではない。「やさしき青白きインテリ」である若者が、戦場という殺戮の場で、人の心の闇と世界の悪に直面させられた。その闇と悪、つまりこの世の現実、彼には耐えがたいものだった。そのため彼の精神は深く傷ついた。その傷つき弱った精神は、社会にも妻にもいやされることなく、「死にたい」という絶望をさらに大きく育てた。シーモアには、

この世はますます耐えがたいものになった。

だからシーモアが自殺したのは、長い絶望の果てに、シビルに託していた最後のかすかな希望も、シビルの言動によって打ち碎かれ、彼には「私は死にたい」という願いしか残らなかったからである。これが、「シーモアの死の謎」つまり「五〇七号室の謎」の答である。以上で、なぜシーモアが自殺したかについては、一つの答えを得たことになる。

### シーモアの死とサリンジャー

では、そのシーモアの自殺を、作家サリンジャーはどう考えていたのだろうか。

そのことを考える手掛かりは、シーモアの自殺の場面にある。シーモアはホテルの部屋に戻ってきて、妻のミュリエルの寝ている隣のベッドで、ピストル自殺する。自殺するにしても、たとえばケイト・シヨパンの『めざめ』の主人公エドナのように、海を沖に向かって泳ぎ続けて、自殺する方法もあったはずだ。ところが、海岸からホテルにわざわざ戻って、妻の寝ている傍らで自殺するのだ。

銃声でとび起きたミュリエルは、血まみれの夫の死体を、隣のベッドの白いシーツのうえに発見する。シーモアの使った拳銃の口径から考えれば、頭の半分が吹っ飛んでいることはないだろうが、いずれにしてもミュリエルは夫のむごたらしい死体を、寝起きに見ざるをえない。

戦場で銃撃された死体を数多く見たにちがいないシーモアは、(その戦場での無惨な光景こそが、おそら

くシーモアの心の不調の原因の一つだと考えられるのだが、自分のピストル自殺の結果の、そのおぞましい光景を想像できたはずだ。

もし万一想像できなかったとすれば、その想像力の欠如こそが、作家サリンジャーの批判の対象になっていたと思われる。というのもサリンジャーは、自殺したあとの血まみれの自分の姿が人目にさらされるのを想像して、自殺を思いとどまる一六歳のホールデン・コールフィールドを描いているからだ。<sup>(42)</sup>

しかしシーモアが自殺後の光景を想像できていたのは、おそらく確かだろう。いやむしろ、その光景が想像できたからこそ、シーモアはわざわざ妻が寝ている隣のベットで、拳銃自殺した。無惨な死体の第一発見者はミュリエルでなければならぬ、とシーモアは考えていたのだ。

ここには、あきらかに妻ミュリエルにたいするシーモアの悪意がある。

たしかに、物質的でだらしない妻のミュリエルは、傷ついた繊細なシーモアにとって、心のいやしにならなかったのは、読者にも理解できる。しかしミュリエルと彼女の母親との会話から、ミュリエルが銃後の妻であったときも、いわゆる貞淑な妻であったことが分かる。また苦しんでいるシーモアを、彼女なりのやり方で、これまで守り弁護していることも分かる。つまりミュリエルは、彼女なりのやり方で夫を愛している。そのことが読者には分かるように、サリンジャーは描いている。

ミュリエルは、精神世界にあまり関心がなくて、だらしないけれども、夫を彼女なりのやり方で愛している。とすれば彼女は、世間にそう珍しくもない若妻だといえる。世間の夫婦は、資質の違いを意識しながらも、相手の愛を感じとることで、一緒に暮らしている。人にはそれぞれ愛のかたちや、表現方法があることを認め、そのそれぞれの愛をいとおしく思うことで、たがいに相手を思いやる気持ちが生まれてくるのだ。



そのことを、作家サリンジャーは分かっていたはずだ。

ところがシーモアは、一方的に自殺する。これは、シーモアが多くの点において異常なほどに繊細ではあるが、ミュリエルが示すような愛についてはまったく鈍感な男として描かれていることを意味する。しかもシーモアは妻のミュリエルへの悪意をあからさまにしたかたちで自殺する。ということは、自殺するシーモアを自己中心的で、妻に対する思いやりの欠けた冷たい男としての一面を持つことを、サリンジャーが暗示しようとしていたと考えられる。このことから、シーモアの自殺について、作者サリンジャーの批判的な気持ちはあきらかである。

注

- (1) ペトロニウス「サテュリコン」(岩崎良三訳)『古代文学集』(世界文学大系64)筑摩書房 一九六一年 三〇一頁。
- (2) J. D. Salinger, *Franny and Zooey* (Boston: Little, Brown, 1961) 68.
- (3) John Wenke, *J. D. Salinger: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne, 1991) 37.
- (4) 田中啓史 『システリアス・サリンジャー 隠されたものがたり』南雲堂 一九九六年 一五四頁。
- (5) Paul Alexander, *Salinger: A Biography* (Los Angeles: Renaissance Books, 1999) 126.
- (6) Joseph Blotner and Frederick L. Gwynn, *The Fiction of J. D. Salinger* (Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1958) 19.
- (7) Alfred Chester, "Salinger: How to Love without Love," *Commentary* (June 1963): 468-70.
- (8) J. D. Salinger, "Seymour: An Introduction," *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Intro-*

- duction* (Boston : Little, Brown, 1963) 105-6.
- (6) Dallas F. Wiebe, "Salinger's 'A Perfect Day for Bananafish'" *Explicator* 23 (September 1964) : item 3.
- (01) Charles V. Genthe, "Six, Sex, Sick : Seymour, Some Comments," *Twentieth Century Literature* 10 (January 1965) : 170.
- (11) Genthe, 171.
- (12) Helen Bannerman, *The Story of Little Black Sambo* (1899, Tokyo : Komichi Shobo, 1999) 50.
- (31) James E. Bryan, "Salinger's Seymour's Suicide," *College English* 24 (December 1962) : 228-9.
- (14) Gary Lane, "Seymour's Suicide Again : A New Reading of J. D. Salinger's 'A Perfect Day for Bananafish,'" *Studies in Short Fiction* 10 (Winter 1973) : 31-2.
- (15) Frank Metcalf, "The Suicide of Salinger's Seymour Glass," *Studies in Short Fiction* 9 (Summer 1972) : 244-6.
- (16) 安藤正瑛『アメリカ文学と禅——サリンジャーの世界——』英宝社 一九七〇年 六九頁。
- (17) J. D. Salinger, "A Perfect Day for Bananafish," *Nine Stories* (Boston : Little, Brown, 1953) 3. 以下 "A Perfect Day for Bananafish" からの引用はこの版にちり頁数のみを記す。
- (18) J・D・サリンジャー『九つの物語』(中川敏訳) 集英社文庫 一九七七年 六頁。
- (19) "Teddy," *Nine Stories*, 172-3.
- (20) "Pretty Mouth and Green My Eyes," *Nines Stories*, 127.
- (21) "Pretty Mouth and Green My Eyes," 117.
- (22) 田中啓史『二五三—七〇頁』。
- (23) Wenke, 35; Bryan, 228; 安藤正瑛, 六八頁。
- (24) Blotner and Gwynn, 19.
- (25) Alexander, 125.
- (26) 田中啓史『二四—五頁』。
- (27) 『サテュリコン』の訳者岩崎良三氏はシビュラの訳注で「彼女の予言は木の葉に書きつけられていたがのちに

- は顧みられず風の吹き散らすままにされた」と解説されている。『古代文学集』三〇二頁。
- (28) 『九つの物語』二五頁。また野崎孝氏は「こらー」と訳しておられる。『ナイン・ストーリーズ』（野崎孝訳）新潮文庫 一九八八年 三二頁。
- (29) J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye* (Boston: Little, Brown, 1951) 72.
- (30) *The Catcher in the Rye*, 213.
- (31) "Seymour: An Introduction," 172.
- (32) "Raise High the Roof Beam, Carpenters," *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Introduction* (Boston: Little, Brown, 1963) 70.
- (33) "Pretty Mouth and Green My Eyes," 124.
- (34) "Pretty Mouth and Green My Eyes," 124.
- (35) "Raise High the Roof Beam, Carpenters," 36.
- (36) "Raise High the Roof Beam, Carpenters," 70.
- (37) James E. Miller, Jr., *J. D. Salinger* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1965) 28.
- (38) Bryan, 228.
- (39) 坂田充編集『世界のハンドガン』国際出版 一九九三年 二二〇頁。尚オートギーズに関連して、赤瀬信吾氏から上記の資料およびちまちなごの教示を賜った。記して深謝します。
- (40) *Framy and Zoey*, 69.
- (41) *Framy and Zoey*, 69.
- (42) *The Catcher in the Rye*, 104.